



杜夫集

新潮日本文学

61

新潮社

© Morio Kita, Printed in Japan 1968

口絵写真撮影 小島啓祐

乱丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

定価 1800円

北 杜 夫 集 新潮日本文学 61

昭和四十三年十月十二日 発行
昭和五十三年六月二十日 八刷

著 者 北 杜 夫

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部・東京(03)二六六一五一一
編集部・東京(03)二六六一五四一一

振替 東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社
製 本 新宿 加藤 製 本

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株式会社
表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 函用紙 日清紡績株式会社
製函 文京紙器株式会社

目次

楡家の人びと

5

どくとるマンボウ航海記

534

*

羽蟻のいる丘

650

不倫

658

谿間にて

666

解説

なだいなだ

692

年譜

704

北
杜
夫
集

輪家の人びと

第一 部

第一章

楡病院の裏手にある。賭場は昼餉の支度に大童であつた。二斗炊きの大釜が三つ並んでいたが、百人に近い家族職員、三百三十人に余る患者たちの食事を用意しなければならなかつたからである。

竈の火はとうにかきだされ、水をかけられて黒い焼木枕になつた薪が、コンクリートの床の上でまだぶすぶすと煙をあげていた。しかし忙しく食器を並べている従業員の誰も、そこへ行って燻っている薪を始末しようとはしなかつた。

た。そんなことにかまつている閑もなかつたし、なによりもそこは伊助爺さんの領分だつたからだ。彼はもう十五年この病院で飯を炊いていて、おまけに御多分にもれぬ一刻者、ちよつとしたことでも他人に嘴を入れられることは容赦できない臍曲りだつたのである。

その伊助爺さんは、充分にみんなをじらしておいたうえで、やおら大釜のお厚いふたを取りはらつた。すると熱気のこもつた炊事場の空気のなかに、もつと火傷するくらい熱く、ねばっこく、親しみぶかい湯気が濛々と立ちのぼつた。爺さんは櫛のような大しゃもじを両手に取りあげる、と、ざぶりとバケツの水に浸し、ふつくと見事に炊きあがつた大量の飯をかきまわしかかつた。釜の底のほうの飯を持ちあげるには、小柄な伊助は木の踏台に乗らねばならなかつた。そうやって飯をひっくりかえしている彼は、かなりのせむしであつた。前かがみになればなるほど、その背中の隆起した瘤はふくれあがつてくるのだつた。しかもその服装がまたよくない。少なくとも賄いをあずかる以上もつと清潔であるべきなのに、その着物はすつかり黒ずんでいて縞模様も定かでなかつた。厚ぼつたい前掛も同様である。手にも顔にも煤がこびりつき、要するにまっ白に炊きあがつた飯とはまつたく対照的な存在といえた。この黒く煤けた背の低いせむしの男が、独自の職人氣質をむきだしにして一心不乱に飯をかきまわしているさまは、どことなく奇怪で、いくぶん滑稽な光景でもあつた。その身な

り風態のため、彼は實際の齡よりずっと老けて見えた。本當はまだ爺さんと呼ばれるのは氣の毒な年齡だったのに。

伊助に清潔な身なりをさせるためにこれまで試みたさまざまな企ても、結局は徒勞に帰した。彼が言うのには、自分には自分のやり方があり、着心地のわるい上つばりなんぞつけた日には、まっとうな飯は炊けっこないというのだった。院長先生さまがびんとした鬘をおつたてなさって、まっとうな診たてをなさるのとおんなじことだ。わしの強情は親ゆずりだ。死んだ兄貴だつてわしとそっくりの氣性でな。

といつて、伊助がもつと皆を困らせたのは予防注射のときである。彼は職務上まっ先にチフスだのコレラだのの注射を受けねばならないのだが、そんな妖しげなものを彼がおとなしくやらせるわけがなかつた。そのうえ彼は大師さまを信じていて、自分にかぎり伝染病なんぞにかかるわけがないと主張するのである。考えた末、伊助が昼寝をしているところを抑えつけようとしたところ、彼はふんどしひとつのまま跣で逃げた。病院の下手は土地が一段低くなり、竹藪たけくさになっている。その竹藪の中に逃げこんでしまつてどうしても出てこない。そんなわけで検病院のこの飯炊きは、未だかつて一度も予防注射をしたことがないのである。

しかし伊助の炊く飯がとびきり上等で口当りのよいことは誰にしる認めねばならない。この夏の米騒動以来、ときどき外米をませねばならぬので以前のような具合にはいか

ないが、検病院の当主である基一郎院長が何回となく、「うちの病院の飯は日本一うまい」と讚めたただけのことではあったのである。もつとも院長はなんでも「日本一」というのが口癖ではあつたけれど。

伊助は、ほうほうと立ちのぼる湯氣にまみれて手慣れた手つきで大釜の飯をかきまわし終ると、いつものように長く言葉をひっぱって、しわがれ声をだした。

「ほうれーえ」

これが合図であつた。大勢の従業員がばらばらと寄つてきて、飯を容器に移しはじめた。むこうでは大鍋から汁をよそつている。アルミニウムの食器ががちやがちや鳴る。下に車のついた配膳台が押されてくる。日に三度の、慌しくも活氣のある光景なのである。

賄いはたしかに一面において検病院の中心でもあつた。そしてこのところ、大まかで単調な病院の業にも思いがけぬ変化のあることが少なくない。この九月には寺内内閣が倒れ、最初の平民宰相原敬があとを継ぐと、みんなの食膳には洩れなく尾頭つきがあつた。なぜなら、この病院の当主である基一郎院長は政友会の代議士でもあつたからだ。もつともごく小さな鯛で、若い書生たちは鯛でも食うように骨ごと呑みこんでしまつた。そしてつい先ごろ、あれだけ執拗しつぱつに頑張つていた独逸がついに屈服した。さすがのカイゼルも——カイゼルというと病院の關係者はどうしても院長の鬘を思い浮べずにいられなかつたが——とうとうへ

たばつたのだ。

町ではこの戦争に半ば無関心であつただけに、なお一層ころげこんだお祭り景氣を愉しもうという気分にあふれてゐた。日比谷公園には、戦捷祝賀の連合国旗に彩られた山形の大門が建ち、群衆は押しあつて怪我をした。飾りつけはなかなかの見物であつた。独逸軍国主義にひっかけた「軍国酒器」というこわれた大ビヤ樽もあつたし、「炎千屁イ輪」(休戦平和)とかいうなんだか意味のよく通じない三間半の大イタチの造り物もあり、哀れな独帝が首を吊られてゐる人形もあつた。夜には提燈行列が出たし、昼には花電車が走つた。こういうことは病院の誰か彼かが見物に行つてニュースをもたらすのである。すると病院を一步も出たことのない婆やから患者から、いつの間にか自分自身でその光景を見たような気分になつた。芝の附近で一台の花電車が火を發したのを見たのは、ちょうどそのころ病院に勤めるようになったばかりの少し足りない看護人であつた。彼は最初の東京市内見物に出て、たまたまこの健俣に行きあわせたのである。

「ほだらよう、アツと思つたらバチバチと火がでてよう、幕やら旗やらに燃えついてよう、蒸気ポンプがとんできただ、蒸気ポンプがよう」

すると、病院の中に小売店をだしている天理教にこつた小母さんまでが、花電車というものは危ないものだ、桑原桑原、と言いだすのだった。

賄いの菜のことに戻れば、原内閣も独逸降伏も棚からボタ餅のことであつたが、それに加えてもうすぐ楡病院の「賞与式」の日がくる。おまけに今年はこの青山に大病院を建ててから十五周年だという話だ。次には暮の餅つきがあつて、正月がきて……と考えるのは、なにも大飯食らいの書生や看護人だけに限られなかつた。

……むつと湯気のこもる賄いの外には、もう本格的な冬の凍えた空気がはりつめてゐた。腐りかけたブリキ罐に何杯もたまつてゐる賄いの屑を二、三匹の穢ない犬がさがさつてゐた。彼らは近所の原つばに巣くつてゐる野犬で、追つても追つても性懲りなくやつてくるのである。銀杏の大木は枝ばかりになつて、それでも北風に立ちむかうような恰好で風呂場のわきに突つたつてゐた。浴場は院長自慢のものである。外観こそうす汚れ、壁際にうす高く積まれた石炭殻があたりの風景をいつそう寒々とさせていたが、内部にはタイルばりの大浴槽があつた。浴槽の下には奇妙に渦を巻いた鉛管が走つていて、この湯こそ治療効果満点のラジウム風呂といふのであつたが、その秘密は院長しか知らない。しかし楡病院の入院案内書には、このラジウム風呂のことが特に一項目をもうけられて、ものものしい美文で説明されてゐたのである。

風呂場から少し離れて、小さいのや大きなのや、古いのや新しいのや、あまり上等とはいへぬ長屋風の家がごしゃごしゃと立並んでゐた。これらは職員員の住宅でもあつた

し、数名からときには十数名もいる書生が住んでいる場所でもあった。基一郎院長がまだ本郷で開業していた頃から、郷里の出身者、あるいはほんのわずかな関係から、彼のところに食客となつている書生は数多かつた。彼らは病院の手伝いをし、勉強をし、医師試験を受けて医者になつていった。現にいまの楡病院の医師、薬剤師の多くはこうした者から成立つていたのである。もっともいくら試験を受けても合格しない者もいたが、院長は彼らに相応しい仕事を世話してやつた。もっとひどいのは、何年か飯を食べ、食べるだけでゆうゆうと月日を過している者もいた。いつの間にか行方不明になつてしまふ者もいた。だが、彼らを養うことは基一郎の道楽の一つでもあったのである。

楡基一郎は決して怒らない、あるいは怒つた気色を露ほども顔に現わさない男である。誰にでも愛想がよかつた。もっともこの愛想のよさは多分に調子のいいことであり、ときにはお世辞そのままに上すべりに響いたが、ともあれ院長は猫にだつて誰にだつて愛想がよかつた。

あるとき、ぐうたら者で有名な一人の書生が、どうしたわけか朝早くから病院の玄関の廊下に立つていたことがある。ただなんとなく立つていたのである。彼は常々自分は医者になる勉強をするために東京に出てきたのであり、楡病院の廊下を掃くために存在しているのではない、と広言していた。そのくせべつに勉強をするわけでもなかつたから、仲間からも陰口を利かれるし、内心いくらか気に病ん

でいたらしい。それでも誰がふき掃除なんかするものかというくらい顔をしてお廊下に立つてみると、そんな朝っぱらから院長がやってくるのが見えた。基一郎は近づいてくると、実に愛想のよい笑顔を見せて声をかけた。

「いや、ご苦労、ご苦労」

それがあまりにも優しい口調だったので、同時に基一郎はすこし顔を上むけて頤でものをいう癖があつたので、書生は半分気がとがめ、半分腹を立ててこう言つた。

「ご苦労つて先生、ぼくはなんにもしちゃいなのです」「いやいや君、朝早くからそうやって廊下を歩いていくれると、病院には活気がでる。いかに繁昌しているように見える。いや、ご苦労ご苦労」

こんな話はざらにあるが、基一郎にしてみればそれは皮肉でもなんでもなく、本当に心底からそう思つてゐることは間違ひなかつた。

風呂場の横手にごしやごしやと立並んでいる家々は、必要以上に楡病院に居住している人々のためであつたが、楡家の娘や息子や女中たちの住いもやはりその中にまじつていた。要するに大変な大世帯なのであり、無理に建てまされたり改造されたりして、いかに雑然としているのはやむを得なかつた。あなたがち壮麗という言葉を使つても言いすぎではない楡病院の正面からの景観にくらべると、この病院の裏手、賄いから始まつて大浴場と何軒もの家屋が密集している地帯は、なんだかうらぶれた大都会の裏町

のように見えた。

その中でいくらかまじに見える二階建ての普請が、院長夫妻をのぞいた家族の家屋であった。それなら院長は一体どこに住んでいたのか？ それは「奥」であった。楡病院の正面のまるで宮殿のような大理石造りの建築——と初めて見る者は誰しも思った——の右半分は患者のための特等室になっている。しかし左半分は、事務室や待合室や外来用の診察室もあつたけれど、なお廊下を辿ってゆくと、そこから先はみんなが「奥」と呼んでいる院長夫妻の住む特殊な部屋々々なのであつた。病院の一人名前も覚えられぬ従業員たちの中でも実際に「奥」を知っている者は数少ない。大廊下をしきっている黒ずんだどっしりした扉から先は勝手に出入りを許されず、「奥」づきの女中が用を弁じた。「奥」にはいわば紫の雲が漂っていた。なんでも洋式の「すんばらしい」便所や、独逸から院長がわざわざ持帰ったダブルベッドとやらが具えてあり、壁は女心も男心をも誘うようなピンク色に塗ってあるそうだと、病院の下つ端の連中は噂した。院長先生はお子さんさえ裏に住まわされている、あんなに沢山の広い部屋があんなさるのだから一緒に暮されたらよかろうに、というのは初めてこの病院に勤めた者がたいい一度は抱く感慨であつた。

その「お子さんたち」の住む裏の二階屋の階下からは、そのとき単調な子供っぽい節まわしの唄がきこえていた。一方の声はかなり甲高いまだ小さな女の子のもので、もう

一方のはずつと年寄つた女の、疲れたような眠たげな調子っぱずれの声であつた。

青山墓地から 白いオバケが三つ三つ

赤いオバケがみつみつ

そのまたあとから 袴はいた書生さんが

スッポンポンのボン

そうやって遊んでいるのは基一郎の三番目の娘桃子で、今日は日曜で学校は休みなのである。相手をしているのは下田の婆やで、肥満した、いかにも柔和そうな、自分の子供を犠牲にしても主家の子女を大事にする、一昔まえの典型的な乳母といつてよい女なのだ。

かつて下田ナオは東京帝国大学附属病院の看護婦養成所を優秀な成績で卒業した。それから日本赤十字病院に勤めた。そのまま勤めていたなら彼女はとうに主席看護婦の地位に近づいていたかも知れない。しかしナオは不幸な結婚をした。不実な男は逃げ、残された小さな男の子は栄養不良で死んだ。そうした彼女を楡家に連れてきたのは基一郎である。同郷のこともあつたが、院長は以前からナオの素質を見抜いていたのである。彼女は本郷時代の楡医院に勤め、青山に移つてからも楡病院の看護婦長を勤めた。しかしやがて彼女は、病院の勤務よりも、もっと楡家に親しい存在、家族の中に溶けこむというよりほとんど家族以前の

存在になつた。つまり彼女は乳を与えない乳母になつたのだ。基一郎の妻ひさが病弱だつたところから、実母に代つて長女の龍子の世話をし、次々にあとから生れてきた四人の子供をすべて手塩にかけた。今となつてはナオはとうに榎家にとつてかけがえない女中頭であり、まるで百年も昔からこの家に根をおろしているとしか思えない。「下田の婆や」なのであつた。といつて彼女はべつに主みたいな年寄りではなく、この年ちようど五十歳だつたが、更に附言すれば、当時は人生五十年といえは上の部に属していたのである。ナオが院長夫人ひさ、つまり「大奥さま」と同じ年齢だつたこともなにかの因縁なのかも知れなかつた。

桃子は近所にある青南小学校の五年生で、まだ女としての顔立ちの見通しは判然とはきかないが、それでも姉たちにくらべて遙かに器量が落ちてゐることだけは断言できた。鼻は丸まっちいといつてよく、頬は下ぶくれしすぎていて、目はくるくると愛嬌よく動いたが、いささか愛嬌がありすぎた。が、そんなことは彼女の責任ではなかつたし、自分が姉たちより病院の誰彼にずつと人氣のあることを彼女はよく知つてゐた。桃子はかなりおませのくせに、こんな子供っぽい遊戯にも夢中になる性格で、小鼻のわきに汗までかきかねない熱中ぶりだつた。

「せつせつせ」と、彼女は息をきらして合図するのである。そして唄にあわせて、相手と交互に掌を打合せた。

この遊戯は、「スッポンポンの」というところで腕組みをするように腕を組合せ、最後の「ボン」でジャンケンをする。桃子は下田の婆やを負かして負かし、ますます活気づき、婆やがいい加減へこたれてゐるのにいっかな止めようとしなかつた。

かたわらでは、長火鉢にかけられた小鍋がぐつぐつ煮えていた。それは流感で隣室に寝ている桃子と二つ違ひの弟のための粥であつた。桃子たちは平生はやはり賄ひの御飯を食べた。もつとも菜の少ないときは別におかずを与えられたけれど、「奥」をのぞいては榎家の家族はみんな賄ひのできる食事をとつてゐるのだつた。彼らの食事は病院の配膳が終つたあとになるので、大抵ずつと遅くなる。

しかし桃子は遊戯に夢中で、もうお昼でかなり空腹になつてゐることなどまるで念頭にないらしかつた。

袴はいた書生さんが スッポンポンのボン

「ちえっ、なにがスッポンボンだい」

と、唐紙ごしにむずかる声がした。榎家の末っ子米国の声である。

「ぼくのお粥まだ？ こちとら、もうてんでお腹がすいちゃつたいー」

米国は上の姉たちが聞いたら目をむいて小言を言いそうな文句を吐きちらかしたが、そのあと犬が遠吠えするように吠きこんだ。この年猖獗を極めた悪質のスペイン風邪にもの見事に彼はやられていなのだ。そしてこの末の子は腺病質の気味があり、たとえ何も流行していなくてもすぐに風邪をひくのは例年のことであった。

米国とはまた途方もない名前だが、これは基一郎の多分にはつたり気味のハイカラ趣味である。桃子と六つ違いの兄は歐洲といった。基一郎がむかし独逸に留学する直前に生れたからである。次に基一郎がアメリカ漫遊を試みた年に生れたのが米国で、ベイコクではあんまりというので郷里の和尚の意見によってヨネクニとよませた。そればかりではない、長女の籠子にしろ次女の聖子にしろ、当時にはなかなか風交りの尖端的な名前といえたが、実は楡基一郎という姓名そのものが自らのハイカラな感覚になって創造されたもので、彼が親から貰った名前は似てもつかない田舎じみたものだったのである。

その楡家の家族の中で一番平凡な名前をもつ桃子は、隣室でむずかっている弟の声を聞くと、とっさになにか応酬してやる言葉を考えて。なぜなら彼女は決して弟と仲が悪くはなかったものの、少なくとも下田の婆やに関しては何となく恨みがあった。姉や兄は齢が違っていた。この年少の二人だけで婆やの取りっくらをするのである。夜、二人は一室に婆やをはさんで寝るのだったが、眠りながらも双方

とも婆やの腕を片一本ずつしっかりと抱きしめていた。下田の婆やはいえは、そんなふうには争奪戦の間に挟まれ、みだりに腕を引っぱられながらも、平気でたいそうの軒をかいて眠りこけた。

しかし桃子は、弟をやりこめることを中止し、その代り前よりずっと甲高い声で歌いだした。

「せっせっせ、青山墓地から……」

下田の婆やは弱ったようだった。病気の米国も心配だったが、うっかり桃子の意志を無視して立ってしまって、桃子は急転直下泣きだす怖れがあった。彼女の泣虫は有名だった。つまらないことで実にたやすく泣きだすのだ。声はあまり立てず、その代り造り物みだいに大粒の涙をぼろぼろとこぼすのである。

「ちようどそのとき、がらりと格子戸のあく音がした。

「婆やさん、また新聞見せてもらえんかね？」

「あつ、ピリケンさんだ」

桃子は喜んで立上り、せっかくのジャンケンポンも忘れてしまったようだった。

ピリケンさんは新聞を声をだして読むのである。朗読するのである。しかも突拍子もなく面白い抑揚をつけて。たとえ内容はよく理解できなくとも、桃子にとってそれは楡病院という雑多で広範囲な機構から生ずるさまざまな愉しみの一つとってよかった。

ピリケンというのは一時流行した西洋人形の名称であつ

たが、それに加えてついこの間まで政權を握っていた寺内前首相の渾名でもあり、ちょっと頭のてっぺんが突出している人間は当時よくこの渾名を冠せられたものである。榆病院のビリケンさんもまた、イガグリ坊主の顛頂がおあつらえむきにとがっていた。彼はもう何年も病院に在る治療患者の一人で、どこかわからないが確かに脳がわるいということだった。楡基一郎は昔は内科百般の医者であったが、独逸では主に精神病学を修め、帰朝してからは脳を病む患者をあつかいだした。青山に新病院を建設してからは、門には二つの看板がかけられた。一つは以前からの『楡病院』であり、もう一つは『帝国脳病院』という名称である。現在では實際のところ、結核をはじめとする各種の病人もいることはいたが、入院患者の主流は精神病の人たちが占めていたのである。

もっともビリケンさんがどんなふうに脳がわるいのかは、桃子はもとより下田の婆やにもわからなかった。もうずっと以前から彼は病院内を普通に歩きまわり、配膳の手伝いをしたり植木を移すの手伝ったりしていて、言動にしてもそれほど変っているとは思われない。もしかしたら新聞を節をつけて読むのが病気なのかも知れない、と桃子は思ったりした。

新聞は「奥」でもとっている。病院でも数種類とっている。それは娯楽室にまわされるが、古くなったのは更に下田の婆やのところに集められてくる。この二階屋でも長女

龍子の夫、養子の「若先生」が新聞をとっているが、そういう古い新聞がすべて束となってこの押入れに積まれてあった。下田の婆やはこれをあとで屑屋に売るのである。ビリケンさんはべつに新しいニュースを知りたいのでやってくるのではなかった。ときには何カ月も前の新聞を読むこともある。二、三日前の新聞にめぐりあうこともある。なんでも活字を読みあげるのが愉しいらしいのである。

彼はずかずか上ってきて、押入れから一束の新聞をとりました。順序もなく積んであるのをいい加減につかむのだから、行きあたりばったりであり、どんな新聞、どんな日附にぶつかるかは仏さまだけが知っていた。

「ほう、こりや都が。こりや新しい」と、彼は呟いた。

その間に下田の婆やはすっかり煮えあがった粥の鍋を持って立って行った。しかしビリケンさんは、早くもいくらか声を震わせて読みはじめた。

彼は「世界の上に未だ嘗て観られざる横浜市の祝捷行列」の記事を読んだ。なんでも、戦いは捷り平和は来れりと高唱する在留外人を中心として、山車や花自動車や馬車があわせて百五十余、列の長さは三十余町にわたる、地球上の民族は敵国を除いて総て殆ど集まったというのである。次に彼はもう一枚の新聞をとりあげて、「安い米は当分食へぬか、正米も期米も依然として高し」と読みあげた。「米は来年には一石五十円はおるか七十円にもならう

といふ。そんな高い米を食はなくても我等は愉快な生活ができるくらゐの意地あり、一月に一日や二日の米無日を実行するに何の苦があらん」

「それ、つまらない。もっとほかのをよう」と、桃子は鼻を鳴らした。

「あいよ。米無しデーはたまらねえからな」

ピリケンさんは気安く答え、今度は半分醬油のしみのある古びた新聞をひっくりかえしはじめた。

「世界に誇るべき大発明、天然色写真の完成、赤貧と闘へる発明家飯田湖兆氏」

と、彼は素敵な調子をつけて読み、桃子はなにがなしうっとりとして、着物の裾がはだけるのもかまわず、まるで男子のように膝をかかえた。

と、廊下に軽い足音がし、同じように軽く障子があいて、基一郎の次女聖子がはいってきた。彼女は、そのだらしのない妹が見ても確かに羨ましくなるような様子をしてきた。江戸紫の絵羽の金紗に朱の袋帯を立矢の字にしめ、その鮮やかな色彩は、彼女の血の氣に乏しい肌の色をいやがうえにも人形のように見せていた。そして彼女が後ろむきになって障子を締めたと、三つ編みにして輪にされた後ろ髪につけられた幅の広いリボンがゆらゆらと揺れた。

聖子はもう流行おくれになつていたとはいえマーガレットに結うのを好んだし、またそれがよく似あつたのである。桃子は一瞬、年下の弟がよくやるように、「ちえっ、いい

なあ」とでも言いたげに口をとがらせたが、すぐにピリケンさんのほうに向き直つた。自分もいつかはあのようなお召を着ることができようとはとても考えられなかったが、しよせんこの姉も自分とは種類を別にした人間であり、それを羨ましがったり憧れたりするのはお門違いであることに桃子はちゃんと承知していたからだ。

たしかに聖子は、誰でもちよつと目をみはらせるような娘であつた。ほそ面で、色白で、そのうえ来春学習院を卒業することになつてゐる移ろいやすい貴重な年齢でもあり、唇から頤の辺りにはまだ脆そうな少女のふくらみが残つていた。これが長女の龍子となると、母親ゆずりのもつと犯しがたい氣品が具わつていたが、その顔は目に見えて縦にのびすぎ、鼻はいくらか驚鼻となつていて、なにか冷やかな、いかつい印象を与えた。聖子はちよつどいい微妙な中間に位置してゐたといえる。もう少し龍子に近づけばどうしても親しみに欠けたであらうし、もつと桃子に近づけばこれは愛嬌のありすぎる墮落であつたらう。そのため楡病院の誰彼はなにかにつけこう噂せざるを得ないのだつた。そりゃあなんといつたつて、聖子さまが一番の別嬪さね。

その聖子は、新聞をひろげてゐるピリケンさんを認めるのと、目にとまらぬほどかすかに眉をひそめ、決して行儀のよいとはいえぬ桃子の姿勢を見るときもつと眉をひそめた。しかし彼女はただこう言つた。

「龍さまはまだ？」

「龍さま？ お二階じゃない？」

桃子はもう一度、聖子の姿を見、さすがに羨ましげに「また出かけるの？」と口に出しそうになったが、しかし彼女はあやうくその言葉を呑みこんだ。「お出ましになるの？」と言わなければならぬのだ。そうでないときと姉は叱るにきまつている。桃子が物心がついてからの記憶にある聖子は決してそんな姉ではなかった。もちろん十三も齡の違ふ龍子から小言をいわれるのならこれは仕方がない。「奥」に閉じこもっている母親はあまりにかけ離れた存在であつたし、龍子が桃子にとって姉というより母に近く感じられるのは自然のことである。しかし、かつては遊び友達であつた筈の聖子までがへんにつんとして、自分より上の姉の味方に変じていったことは、どうしたつて桃子には癪にさわることであつた。学習院がいけないのだ、と彼女はわけもなくそう考へた。

乃木將軍が院長となつて以来、平民の子女もはいれるようになった学習院の女学部、さつそく龍子を入学させ、ついで聖子をもそこへ送りこんだのは基一郎の意図である。龍子は楡家にさまざまな学習院言葉を輸入し、基一郎はもちろんこれを嘉納した。はばかりのことを御不浄、お床をお床、蚊帳を蚊帳と呼ぶようなたぐいである。これはいかにもそぐわぬ、とつてつけた、田舎者が東京の文明にあこがれるようなものであつたが、基一郎の感覚では楡

家にはこれが必要なのであつた。なぜなら楡家は基一郎が一代で新しく創りあげ、なお創りあげつつあるもので、なんでもいからほかと變つた伝統みたいなものをかき集めたかつたからである。学習院でも普通友達同士は「さん」づけて呼び、ときに「様」と呼ぶ。大名華族の子女は様づけで呼ばれるが、そうとわかれば基一郎が自分の家族に「龍さま」「聖さま」を持ちこませたのは当然のことともいえた。

一方、ビリケンさんは、聖子がいって来たとき多少逡巡したようであつた。桃子なぞは嬢ちゃんて済んだが、聖子となるとこれはお嬢さまであり、かなり「奥」に近い存在となるからだ。更に龍子となればほとんど「奥」に直結した若奥さまであり、うかうか新聞などを読むどころではなかつた。

しかし彼はもうすでに新聞を読みかけており、いったん読みだした以上、彼にとつてほかのことは実に稀薄になつてしまふのだつた。

「写真界の驚異なる世界的大発明の天然色写真はわが同胞によつて發明完成され……」

と、彼はつづけた。しばらくは口ごもるような声だったが、次第になにかも忘れ、ときには高くときには低く、桃子がなにより愉しみにしている独特の抑揚をつけて読みすすんでいった。

「忝なくも梨本宮妃殿下には農展に於て現品の台臨を辱な